

英語楽曲を原曲とする翻訳唱歌の歌詞分析：『小学唱歌集』を中心として②

佐藤，慶治
九州大学大学院比較社会文化学府国際社会文化専攻

<https://doi.org/10.15017/1806668>

出版情報：地球社会統合科学研究. 6, pp.41-49, 2017-02-28. 九州大学大学院地球社会統合科学府
バージョン：
権利関係：

英語楽曲を原曲とする翻訳唱歌の歌詞分析

—『小学唱歌集』を中心として—②

サ トウ ケイ ジ
佐 藤 慶 治

1. 本研究の目的と導入

本論文は、拙稿「英語楽曲を原曲とする翻訳唱歌の歌詞分析—『小学唱歌集』を中心として—」(地球社会統合科学研究創刊号、2014)の続編であり、『小学唱歌集』における英語楽曲を原曲に持つ唱歌楽曲の比較歌詞分析を行うものである。諸所の文献において、明治期の唱歌教育は、徳育やナショナル・アイデンティティの創出を担う役割を果たしてきたとされている。1879年に文部省・音楽取調掛が設立され、インフラ整備や経済政策に先駆けて、積極的に西洋音楽文化の取調、教育が行われた。これは音楽が、明治時代には単なる芸術としては捉えられておらず、「国民意識」を確立させる役割を期待されていたという理由が大きい。明治時代初期、欧米列強と対峙することを迫られた「日本」にとって必要なことは、「日本」という国を近代的な国民国家に造り換えることであったが、それまでの「日本」という「国」には、政治的な統一はあっても、民の、自分たちは「日本国民」であるというような帰属意識は皆無であった。そのため、明治以降の国づくりは、まさしくベネディクト・アンダーソンの言う「想像の共同体」を造る作業だったと言える。音楽教育政策を担当していた文部省・音楽取調掛の人々は、唱歌の歌詞に、天皇への崇拜意識を中心とした「教育的要素」を組み込むことにより、まだ国民国家という意識の低かった明治初期日本において、「国民づくり」を行っていた。

そもそも1872年、日本最初の近代的学校制度である「学制」が公布された際に、小学校の1教科として「唱歌」が定められた。しかしこれは、欧米の教育制度を模倣して定められただけのもので、教科書や指導者もなく、有名無実な教科であった。米国留学から帰国した文部官僚、伊澤修二らの提唱により、文部省は1879年に音楽取調掛を創設し、伊澤がその御用掛として任命される。伊澤は、ボストンにおいて音楽教育を師事していた音楽教育者、ルーサー・ホワイティング・メーソンをお雇い外国人として日本に招聘。1881年から84年にかけて、日本最初の官製音楽教科書『小学唱歌集』全3編を編纂

する。この『小学唱歌集』には91曲の楽曲が掲載されているが、そのうちの81曲が外国語楽曲に日本語の歌詞をつけた「翻訳唱歌」と呼ばれる楽曲であり¹、主に英米やドイツの民謡・唱歌、特に前述のメーソンが編纂した学校用音楽教科書シリーズ『国楽大系』の楽曲を原曲としている。「翻訳唱歌」については、「翻訳」と言っても「他言語間におけるテキストの訳出」という意味のみならず、「翻案」で作られた歌詞や、もしくは全く原曲歌詞と違う内容の歌詞もあった。『小学唱歌集』楽曲の歌詞は、稲垣千穎・加部厳夫・里見義ら音楽取調掛員により作成された。作成方法は、教育学者の山住正巳により、「原曲の歌詞を翻訳し、次いで曲を分解して、日本の伝統的な詩の形式に従って作詞しやすくした上で、分解した曲に合わせて歌詞の修正を加えた」と分析されている²。本研究においては、翻訳唱歌歌詞と原曲の歌詞を比較分析し、そこにどのような意図的改変があるかを分析する。それにより、当時の日本でどのような国民が求められていたか、違う言い方をすれば、文部省がどのような「国民づくり」を行いたかったのかを推察することができる。明治時代の唱歌教育とナショナル・アイデンティティに関する先行研究は、山住正巳『唱歌教育成立過程の研究』(東京大学出版会、1967)や中村康介『近代日本洋楽史序説』(東京書籍、2003)、奥中康人『国歌と音楽』(春秋社、2008)など、優れた研究が数多く存在する。しかし、その研究は主に国内における事象のみを扱ったものがほとんどであり、西洋の教育思想・文化との比較については、十分な研究が行われていない。音楽学者の中村理平は、『キリスト教と日本の洋楽』において、原曲のキリスト教義が意図的に取り込まれたと以下の様に評している。「賛美歌には主に捧げる献身と愛、そして主から受ける許しと慰めが大きな部分を占めています。明治政府がこれに目をつけられないわけがありません。日本での『主』は『主上』『大君』すなわち『天皇』にはほかありません。神をあがめ神を敬う賛美歌の旋律と精神は歌詞を変えればそのまま天皇への帰依と服従、そして天皇からの慈悲を願う国民の魂の育成に通じる」³。本論文では、これまでに比較分析を行っていなかった『小学唱歌集』

の楽曲より、8曲を対象として原曲歌詞との比較分析を行う。対象楽曲の選定に当たっては、「歌詞が翻案によって作成されていると見なせる翻訳唱歌」という基準を設けた。

2. 『翻訳唱歌』の歌詞分析

教育学者の唐澤富太郎は、自著の『教科書の歴史』(創文社、1956)において、『小学唱歌集』全楽曲の歌詞分類表を作成している。大分類として、「自然・生活・行事に関するもの」、「君が代を祝うもの、忠君愛国的なもの」、「教訓的なもの」の三つに分かれており、このうち後者二つは歌詞の性質上、直接「国民づくり」を担っていると思えることができる。また、「自然・生活・行事に関するもの」について言えば、国民国家を擬制的共同体として国民に受け入れさせるためには、それを受け入れる側の文化的な共通認識の前提が必要であり、「自然・生活・行事に関するもの」をテーマとした唱歌も、「歌」という装置を利用することによって国民間の文化的な共通認識を高め、学校教育における「国民づくり」に一役買ったと言えるだろう。以下、それぞれの楽曲歌詞の比較分析を、『小学唱歌集』楽曲歌詞・原曲訳詞・原曲原詩・解説の順に記述していく⁴。原曲訳は全て筆者によるものである。

第四十九《みてらの鐘の音》

- 一 みてらの鐘のね、月よりおつる、
ふみよむ燈火、かすかになりて、
一二三四五六七八、
- 二 月影かたぶき、霜さえわたり、
ねよとの鐘のね、枕にひびく、
一二三四五六七八、
- 三 漁火しめりて、霜天にみち、
姑蘇城外なる、鐘かもきこゆ、
一二三四五六七八、

《聞け、遠くの時計を》⁵

聞け！ 遠くの時計が思い出させる、
もう一つの時間は自由だということ、
夜が来て、一日の終わった時間は。
お休みを言い、ベッドに入る。
一二三四五六七八。

HARK! THE DISTANT CLOCK.
Hark! the distant clock reminds us,
That another hour has fled,

Night is come, the day is ended;
So, good-night't is time for bed.
One, two, three, four, five, six, sev'n, eight.

原曲は、四分の四拍子・ハ長調で、(ほとんど)子守唄と言ってよい、眠りについて歌った素朴なもの。最後の数字を数える部分は、二分音符のドの音が連続して続き、恐らくボーンボーンという柱時計の音を表しているのではなからうか。それに対して原曲は、乾いた空に寺の鐘の音が鳴り響く歌詞に翻案されており、唐澤の歌詞分類では「自然・生活・行事に関するもの」のうち、「自然」を歌ったものに分類されている。興味深いことに、姑蘇城という中国の城が歌詞に読み込まれており、これは、姑蘇城外にある寒山寺から夜半を告げる鐘の音が船まで聞こえてきたという情景を歌った、唐代の詩人・張継の漢詩「楓橋夜泊」に基づいているのであろう。数字を数える部分は原曲のままの歌詞であり、こちらもやはり鐘の音を表している。

第五十三《あおげば尊し》

- 一 あおげばとうとし、わが師の恩、
教えの庭にも、はやいくとせ、
おもへばいと疾し、このとし月、
いまこそわかれめ、いざさらば、
- 二 互にむつみし、日ごろの恩、
わかるさ後にも、やよわするな、
身をたて名をあげ、やよはげめよ、
いまこそわかれめ、いざさらば、
- 三 朝ゆうなれにし、まなびのまど、
ほたるのともし火、つむ白雪、
わするるまぞなき、ゆくとし月、
今こそわかれめ、いざさらば、

《卒業のための歌》⁶

- 1 今日、我らは別れ、再びめぐり合おう、
神が我らを天に召す時。
私たちは教室を出でて、
一人さまよう。
幼馴染たちは、過去となり、
過去の中で生き続ける。
しかし、最期は光と愛の国で再会する。
- 2 さらば古き部屋よ、お前の中で楽しみ、
皆と会うことはもうない。
朝、声を揃えて歌うことも、
夕べの賛美歌を繰り返すこともない。
しかし、幾年も後の世、

私たちは愛と真実の光景を夢見る。
 汝は最も大切な思い出になるだろう、
 私たちが若き日を過ごした教室は。

- 3 さらば、私たちが愛した汝よ。
 さらば懐かしき級友たちよ。
 私たちの結び目は切れる、
 幸せの絆の結び目は。
 われらの手は固く握られ、胸にあふれ、
 目には涙がにじむ。
 ああ、これぞ別れの時、
 級友たちは「さよなら」を告げる。

Song for the Close of School

- 1 We part today to meet, perchance,
 Till God shall call us home;
 And from this room we wander forth,
 Alone, alone to roam.
 And friends we've known in childhood's days
 May live but in the past,
 But in the realms of light and love
 May we all meet at last.
- 2 Farewell old room, within thy walls
 No more with joy we'll meet;
 Nor voices join in morning song,
 Nor ev'ning hymn repeat.
 But when in future years we dream
 Of scenes of love and truth,
 Our fondest tho'ts will be of thee,
 The school-room of our youth.
- 3 Farewell to thee we loved so well,
 Farewell our schoolmates dear;
 The tie is rent that linked our souls
 In happy union here.
 Our hands are clasped, our hearts are full,
 And tears bedew each eye;
 Ah, 'tis a time for fond regrets,
 When school-mates say "Good Bye."

原曲は、2011年に英文学者の櫻井雅人によって発見された、*Song for the Close of School*。《仰げば尊し》という有名曲の原曲であるこの歌は、永らく不明であり、唱歌研究における最大の謎とされてきた。《仰げば尊し》と同じく3連形式の楽曲であり、歌詞も卒業をテーマにしたもの。しかし、原曲の歌詞が単純に旧友や教室との別れを惜しむものであるのに対して、唱歌の歌詞は、「師への恩」を軸に成り立っている教訓的なものであり、唐

澤の歌詞分類では「教訓的なもの」という大分類のうち、「勉強・勤勉」の項目に入れている。教師という職業が、戦前、「聖職」として高い地位を誇っていたのは、この歌に見られるように、儒教に基づいた教育を推進していた文部省が、「師への恩」というものを重要な「教育的要素」に位置づけていたからということも大きかったのではなからうか。また、唱歌の第3番における「蛍」と「雪」の言葉は、『小学唱歌集』第20番《蛍の光》でも引用されている「蛍雪の功」の故事に基づくものと推察される。

第六十九《小枝》

- 一 小枝にやどれる、小鳥さえ、礼はしる、
 道をもならいし、其人を、わするなよ、
 二 吾家にかいいる、犬さえも、恩はしる、
 君にもつこうる、ますら男よ、身をつくせ、

《タイトルなし》⁷

私はあなたを賛美する、おお神よ、
 そして永遠にあなたの名前を讃える。
 私は毎日、感謝をささげ、
 そして永遠にあなたの名前を讃える。

I will magnify Thee, O God, and
 praise Thy name forever and ever.
 Ev'ry day will I give thanks, and
 praise Thy name forever and ever.

原曲が1連の歌詞であるのに対し、唱歌では2連仕立てに拡大している。原曲は、短い練習用のような曲ながらも、典型的な賛美歌の歌詞。「毎日の、神への感謝」というキリスト教義に基づいたものである。それに対し唱歌は、唐澤が「教訓的なもの」のうち「人倫・人生」の項目に分類していることから分かるように、人生においては「礼儀・恩」を大切にしなければならないという内容の教訓的なもの。第2番では、「犬さえ恩を知っているのだから、立派な男性諸君はなおのこと（国や天皇陛下のために）身をつくせ」という、ジェンダー色を含んだ内容が見られる。

第七十一《鷹狩》

- 一 しらふの鷹を、手にすえもち、
 馬にまたがり、いさめる君、
 すわや狩場に、ゆけゆけゆけ、
 二 雪は狩場に、ふれふれふれ、
 犬はかり場を、かれかれかれ、

鳥ぞむれたつ、それぞれそれ、

《狩人たち》⁸

聞け！ 私には獵師たちの角笛が聞こえる。

ほれほれほれ！

木を越え、大地をかけ、

素早く行く、

吠え声の聞こえる所へ。

ほれほれほれ！

THE HUNTERS.

Hark! I hear the hunters'horn;

Hollo! hollo! hollo!

Thro'the wood and thro'the field,

The hunters swift doth go;

Follow where the hounds are heard;

Hollo! hollo! hollo!

原曲は1連の歌詞だが、唱歌歌詞はその内容を膨らませて2連仕立てにしている。原詩は、勇ましい狩人たちの獵の様子を歌ったもの。唐澤によって「自然・生活・行事に関するもの」のうち「生活・行事」の項目に分類されている唱歌は、「狩り」というキーワードで原曲と結びついてはいるものの、「鷹狩り」という、より日本的な行事に読みかえられている。江戸時代、大名たちが特権的に行っていた「鷹狩り」は、明治維新後に自由化されるが、『小学唱歌集』編纂当時には、まだ一般庶民が楽しめるものではなかった。当時の文部省の教育意図として、俗なものを廃し、より高尚なものを取り入れていくということがあり、その点で、より原詩に基づく、例えば「マタギの狩り」などをテーマとするよりも、「鷹狩り」という要素を歌詞に取り入れたと推察できる。しかし、歌詞そのものは、*Hollo! hollo! hollo!*と「それぞれ」など、原詩と唱歌歌詞で共通する部分が多い。

第七十五《春の野》

- 一 いつしか雪も、きえにけり、
梅さく野辺に、いざゆかん、
- 二 みどりに草も、もえぬれば、
わかなつむ子も、うちむれて、
- 三 柳のいとも、なびくなり、
こころをのべに、あそばまし、

《春の到来》⁹

- 1 春、気持ちの良い春が訪れた。
彼女の美しさを見たいものは、

早く外を歩き回ろう、

大地の花々を見るためにも！

- 2 それは深い森の奥に隠れた。
彼女が横たわる、全ての冬は。

鳥が彼女を目覚めさせる。

そして今、彼女は再びここに。

- 3 陽気な春が再びやってきた、
喜びと、快活な歌と共に。
彼女の美しさは一面を魅了し、
喜びをもたらす。

- 4 そして緑の牧草地へ現れ、
我々を自由に歩き回らせる。

春が最初に到来したとき、

誰が家などに留まるだろうか。

ARRIVAL OF SPRING

- 1 The Spring, the merry Spring is come;
Who would her beauties see,

Oh, let him quickly forth to roam,

The meadow flow'rs to see!

- 2 Concealed amid the forest deep,

All winter hath she lain;

A bird hath roused her from her sleep,

And now she's here again.

- 3 The spring returns again to cheer,

With joy and merry song;

Where'er her beauteous charms appear,

Delights around her throng.

- 4 Then forth into the meadows green,

And let us freely roam;

When first the coming Spring is seem,

Oh, who would stay at home?

原曲が4連なのに対し、唱歌は3連に減らされている。原曲ではspringという単語を大文字で始め、擬人化の手法をとっている。それに対して、唐澤が「自然」の項目に分類した唱歌の歌詞は、一見したところ、「春」というテーマを参考にしただけの、原詩に比べると単純な歌詞内容に見える。しかし、それぞれの連に「梅」、「若菜」、「柳」という季語が付け加えられており¹⁰、ここにこそ『小学唱歌集』における「自然」を歌った楽曲歌詞の特徴がある。『小学唱歌集』における「自然」を歌ったほとんどの楽曲歌詞には季語が含まれており、これは「日本の美」の最大のテーマである「四季」を定型イメージ化し、「日本の美」に関する共通認識を日本国民に浸透させる役割を担っていたと考えられる¹¹。

第七十八《菊》

- 一 庭の千草も、むしのねも、
かかれてさびしく、なりにけり、
ああしらぎく、嗚呼白菊、
ひとりおくれて、さきにけり、
- 二 露にたわむや、菊の花、
しもにおごるや、きくの花、
あああわれあわれ、ああ白菊、
人のみさおも、かくてこそ、

《夏の最後のバラ》¹²

- 1 夏の最後のバラが
孤独に咲いている。
愛らしき彼女の仲間たちは全て、
枯れて散ってしまった。
仲間の花はおろか、
もはやツボミさえない。
彼女の美しかった頃を思い起こし、
ただ嘆くのみ。
- 2 私はお前を一人にはしない、
茎にくつつき悲しんでいるお前を。
愛らしい仲間は眠っている、
お前も仲間と共に眠れ。
私はそれを振りかける、
お前の花びらをベッドへ、
庭の仲間たちが、
香りも失せて眠る床に。
- 3 私もすぐ後を追う、
友が皆いなくなったとき、
愛の光り輝く輪を離れて、
宝石が消え失せてしまったら！
真心が枯れはてたとき、
愛する者が消失してしまったなら、
おお、だれが存在できよう、
この孤独な壊れた世界に？

The Last Rose of Summer

- 1 Tis the last rose of summer,
Left blooming alone;
All her lovely companions
Are faded and gone;
No flower of her kindred,
No rosebud is nigh,
To reflect back her blushes,
Or give sigh for sigh.
- 2 I'll not leave thee, thou lone one!

- To pine on the stem;
Since the lovely are sleeping,
Go, sleep thou with them.
Thus kindly I scatter,
Thy leaves o'er the bed,
Where thy mates of the garden
Lie scentless and dead.
- 3 So soon may I follow,
When friendships decay,
And from Love's shining circle
The gems drop away.
When true hearts lie withered,
And fond ones are flown,
Oh! who would inhabit
This bleak world alone?

原曲は、有名なアイルランド民謡である *The Last Rose of Summer*。原曲が3連の歌詞なのに対し、唱歌では2連に減らされている。唱歌歌詞は唐澤によって「自然」の項目に分類される。原曲は、「秋風の立ち始めた庭で、一輪だけ咲き残ったバラへの愛情を歌ったものであるが、この作詞者は当時の日本人の好みに合わせて、初冬の残菊の毅然として霜にもめげず咲いている姿を歌う歌」¹³に変えた。ちなみに、菊の季語は秋である。バラも、当時既に夏の季語に選定されていたので、やはり菊が日本人好みということが大きかったのだろう。唱歌の最後は、厳しい寒さに耐える菊に例えた、「人のみさおも、かくてこそ」という教訓的なフレーズで締めくくられている。

第八十三《さけ花よ》

- 一 さけ花よ、さくらの花よ、
のどけき春の、さかりの時に、
さけ花よ、桜のはなよ、
- 二 ふけかぜよ、春風ふけよ、
さきたる花を、ちらさぬほどに、
ふけ風よ、はるかぜふけよ、
- 三 なけ蛙、やよなけ蛙、
すみゆく水の、にごらぬ御代に、
なけ蛙、やよ鳴け蛙、
- 四 なけ鳥よ、うぐいすなけよ、
さきたる花の、さかりの春に、
なけとりよ、鶯なけよ、
- 五 やよ人よ、ひとひとつたえ、
鶯かはず、うたをばうたう、
やよ人よ、ひとつひとつたえ、

《春のやすらぎ》¹⁴

- 1 ハイホー！ 小さな花々、茂り花さく。
お前の実を美しく割ろう。
お前の香りで目覚めよう。
- 2 ハイホー！ 優しいそよ風が我々を楽しませる。
穏やかな空が微笑む。
地球は愛で満たされている。
- 3 ハイホー！ 大地の嵐、お前の風を歓迎する。
丘や谷に沿って吹き、
輝き銀色に波打つ。
- 4 ハイホー！ 春の鳥たち、お前の喜びをあらわして
歌え。
お前が軽い翼で浮いている間、
陽気な歌を鳴り響かせてくれ。
- 5 ハイホー！ みな喜びの輪に加わろう。
誰が悲しむだろう？
私たち全てが楽しんでいるとき。

THE SWEETS OF SPRING

- 1 Hyho! Little flowers, flourish and blossom,
Let thy bud in beauty break,
Let thy fragrant sweetness wake.
- 2 Hyho! Gentle breeze kindly regale us,
Mild the sky that smiles above,
Earth beneath is filled with love;
- 3 Hyho! Meadow streams, welcome your flowing!
Hie along'midst hills and dells,
Bright your silvery rippling swells;
- 4 Birds of spring, sing forth your pleasures:
While ye pass on nimble wing,
Let your gladdening music ring;
- 5 Hyho! One and all, join the rejoicing;
Who among us will be sad,
When all else around is glad?

原曲も唱歌も5連の歌詞。それぞれ第1連が「花」、第2連が「春風」、第4連が「鳥」について歌っており、「春」というテーマも一致している。唱歌は、唐澤によって「自然」を歌った歌詞に分類されており、日本における翻案としては、やはり季語が加えられていることが大きい。「桜」・「蛙」・「鶯」、全て春の季語である。

第九十一《招魂祭》

- 一 ここに奠る、君が霊、蘭はくだけて、
香に匂い、骨は朽ちて、名をぞ残す、
机代物、うけよ君、

- 二 此所にまつる、戦死の人、骨を砕くも、
君が為、国のまもり、世々の鑑、
ひかりたえせじ、そのひかり、

《兵士たち》¹⁵

- 1 神聖な場所に来よ、
そこでは我々の誇りが眠っている。
彼らの最も価値あるものを皆に捧げ、
そして彼らのベッドを飾る。
来よ、残され、悲しんでいる者たち。
兵士の寡婦は勇敢で、
残された小さな子供たちは、
彼らの父の墓で祈る。
- 2 父と母が訪れ、頭を垂れる。
そこには彼らの誇り高き息子が眠る。
愛と癒しを得る。
兄弟、姉妹たちが訪れる。
兄弟は、愛を求める。
あなたは最も豊かなものを捧げられる。
心と手を。
- 3 さまよえる兵士たちよ、ここに集え。
お前の仲間はどこで眠っている。
彼らは鉄の雹に陥落した。
お前の横にいる時に。
我々の国の神は、
我々の国を富ませてくださる。
そしてこの神聖な場所を飾って下さる、
目覚めの朝まで。

Soldiers

- 1 Come to the sacred spot
Where rest our honored dead;
Let all their richest off'rings bring,
And decorate their bed.
Come, ye bereaved and sad;
Widows of soldiers brave,
Your little orphan'd children bring,
To bless their father's grave.
- 2 Fathers and mothers come,
Bowed down by age and care;
Here rest your noble, honored sons,
Objects of love and care.
Brothers and sisters come;
Your brother's love demands,
The richest off'rings you can bring,
Off'rings of hearts and hands.

3 Come, soldiers, gahter round
Your comrades sleeping here;
They fell beneath the iron hail,
While you were standing near.
Our nation's God protect,
Our nation's wealth adorn
And beautify this hallowed spot,
"Till Resurrection morn.

原曲が3連なのに対し、唱歌は2連の歌詞。どちらも戦死者を悼む歌詞内容であり、唱歌の方は、唐澤によって「君が代を祝うもの、忠君愛国的なもの」のうち「忠君愛国」の項目に分類されている。原詩の方は、Godという単語の含まれているキリスト教的な歌詞内容でもあるが、唱歌では、それを「君が為」、すなわち天皇への崇拝に置き換えている。ちなみに、唱歌に後付けされたテーマである「招魂祭」が初めて行われたのは1862年であり（この時は、有志によって殉難志士が祭られた）、その7年後、「招魂祭」を行う目的で招魂社、すなわち現在の靖国神社が設立されたのである。「机代物」とは神道の儀式に使われる供え物のことだが、これを「うける」ということは、死者の魂が神道の神になったということを表している。

3. 結びにかえて

以上で本論文における分析を終える。『小学唱歌集』より、これまで歌詞分析を行っていなかった8曲の比較分析を行った。最初に述べたように、本論文は拙稿「英語楽曲を原曲とする翻訳唱歌の歌詞分析—『小学唱歌集』を中心として—」の続編であり、研究目的・方法など、前論文に準じている。《みてらの鐘の音》、《あおげば尊し》には、漢詩や故事が引用されているが、他にも例えば第56曲《才女》には清少納言の逸話が組み込まれているなど、『小学唱歌集』には古典に基づいた楽曲歌詞が多く、音楽取調掛員たちの教養がうかがわれる。「鷹狩り」や「招魂祭」のテーマは明らかに音楽取調掛の後付けであり、これらの文化・儀式を定着させたかったということであろう。また、*Song for the Close of School*と*The Last Rose of Summer*以外の英語楽曲6曲は、これまで日本語訳が出版されていなかったため、その掲載も本論文の成果に挙げたい。

ゴチェフスキ・櫻井雅人『仰げば尊し—幻の原曲発見と「小学唱歌集」全軌跡』（東京堂出版、2015）pp.310-360.を参考とした。

- ² 山住正巳『唱歌教育成立過程の研究』（東京大学出版会、1967）pp.81-83.
- ³ 中村理平『キリスト教と日本の洋楽』（大空社、1996）pp.571-575.
- ⁴ 以下、『小学唱歌集』楽曲歌詞の出典は、伊澤修二著、山住正巳校注『洋楽事始 音楽取調掛成績申報書』（平凡社、1971）からとする。
- ⁵ L. W. Mason, *National Music Charts, For the Use of Singing Classes, Seminaries, Conservatories, Schools and Families, 1st series* (Bostonn: Ginn Brothers, 1872) p.39
- ⁶ H. S. Perkins, ed., *The Song Echo: A Collection of Copyright Songs, Duets, Trios, and Sacred Pieces, Suitable for Public Schools, Juvenile Classes, Seminaries, and the Home Circle* (New York: J. L. Peters, 1871) p.141
- ⁷ John Hullah, *The Grammer School Corus* (Oliver Diston & Co., 1866) p.59
- ⁸ *The Song Echo: A Collection of Copyright Songs, Duets, Trios, and Sacred Pieces, Suitable for Public Schools, Juvenile Classes, Seminaries, and the Home Circle*, p.37
- ⁹ L. W. Mason, *National Music Charts, 2nd series* (Bostonn: Ginn Brothers, 1870) p.40
- ¹⁰ 季語の分析には、『小学唱歌集』と同時代に編纂された歳時記である根岸和五郎編『太陽暦四季部類』（山静堂、1878）を使用した。
- ¹¹ くわしくは、拙稿「明治期の唱歌歌詞における『日本の美』—季語とナショナル・アイデンティティ—」（総合文化学論輯第二号、2015）を参照されたし。
- ¹² J. P. McCaskey, *Franklin Square Song Collection, no. 1* (New York: Harper & Brothers, 1881) p.148
- ¹³ 金田一春彦編『日本の唱歌（上）明治篇』（講談社文庫、1977）pp.52-52.
- ¹⁴ Wm. B. Bradbury, *Musical Gems for School and Home* (New York: Mark H. Newman, 1851) p.54
- ¹⁵ *The Song Echo: A Collection of Copyright Songs, Duets, Trios, and Sacred Pieces, Suitable for Public Schools, Juvenile Classes, Seminaries, and the Home Circle*, p.246

注釈

¹ 以下、唱歌の原曲情報については、安田寛・ヘルマン・

【主な参考文献】

- ・唐澤富太郎『教科書の歴史』（創文社、1956）
- ・山住正巳『唱歌教育成立過程の研究』（東京大学出版会、1967）
- ・伊澤修二著、山住正巳校注『洋楽事始 音楽取調掛成績申報書』（平凡社、1971）
- ・山東功『唱歌と国語 明治近代化の装置』（講談社、2008）
- ・渡辺祐『歌う国民 唱歌, 校歌, うたごえ』（中公新書、2010）
- ・松村直行『童謡・唱歌でたどる音楽教科書のあゆみ』（和泉書院、2011）
- ・安田寛・ヘルマン・ゴチェフスキ・櫻井雅人『仰げば尊し一幻の原曲発見と「小学唱歌集」全軌跡』（東京堂出版、2015）

A Study on Japanese Songs of the “Shogaku-Shokashu” in Comparison to the English Originals ②

SATO Keiji

In 1872, the Japanese government in the Meiji era (1868 ~ 1912) promulgated school education policies known as “gakusei” (学制). In these policies, the subject of music was established as “shoka-ka” (a department of shoka). “Shoka” took on a role of moral education and helped to construct a national identity in the Meiji era. In early Meiji, the Japanese government actively pursued research into Western music and music education ahead of infrastructure development and economic policies. The music education research institution in the Ministry of Education, “Ongaku-Torishirabe-Gakari,” (音楽取調掛 1879 ~ 1887) integrated educational contents, which featured worship to “tenno” (the Emperor of Japan), into the lyrics of “shoka” songs.

“Shoka” songs that are based on foreign songs and keep the same melodies as the originals, such as “Hotaru no hikari,” (蛍の光) are called “honyaku shoka” (translated school songs). However, they are not verbatim translations, and there are many adaptations of these songs. The national image in the Meiji era can be analyzed by comparing “shoka” with their original counterparts. However, as of yet there are no studies based on this method of “shoka” analysis. This paper aims to address the abovementioned matters by examining the songs of the “Shogaku-Shokashu” (小学唱歌集) and comparing the translations to the original English texts.